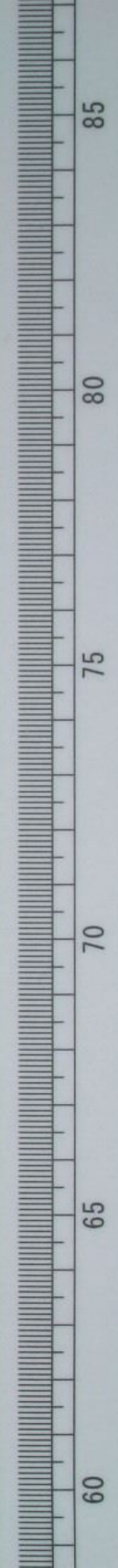




萬葉集序歌抄

4  
2269





萬葉集序歌抄

● 高須田 ● 森田 ● 高須田 ● 增加補



阿行之部

ア 阿要奴  
ア 吾下婆倍  
不飽



十一 秋叶を水草の花のあえぬうり思へとまづら直み逢ふさへ  
 十四 足柄のたぬかすこころをあらむもはくをこらしてほるのむ  
 四 朝日さけあふる山り四月のあはるをよと山神あかまて  
 九 苦も暮行日丸吉世川まきまきしつをえわをわぬ  
 十一 長谷川早き早瀬ま絡ひあえ飽をや妹と同ひ  
 十一 秋首すもれ白なみあふほろあはるを月をさむ

阿

飽明

浅

朝妻

朝景

思

不逢 何怜 無跡

○<sup>四ノセウ</sup> 難波うらやのそらあふふ人の久し子を老いし

○<sup>六ノヤウ</sup> 任吉の粉屋をみてもなまらけくもなまらけくを

○<sup>七ノヤウ</sup> 王うけおちふあしあはれは君う若おは吾若うと

○<sup>七ノヤウ</sup> 唐瀬川袖はくはうり成きやんあめをきくも

○<sup>七ノヤウ</sup> あきう山うけさへる山の井の浅きんを君わんか

○<sup>七ノヤウ</sup> くらそふの為津衣あきく不逢人うとふらふ

○<sup>七ノヤウ</sup> あら降のあきらの夜あきはうふ妙しは妙しあはれ

○<sup>七ノヤウ</sup> 子らまふのうらうらき朝妻は山きふはなを

○<sup>七ノヤウ</sup> 夕月夜あうほきやうの朝うけふ吾身はあはれ思ひ

○<sup>七ノヤウ</sup> 筑波嶺あをうしふるは是種山あおと見ええ

○<sup>七ノヤウ</sup> 妙多うらまはふらはのさうまきあーと一言か

○<sup>七ノヤウ</sup> こけられ誦ふく娘のあきうの悲けはらと思ひ

○<sup>七ノヤウ</sup> 秋のゆき朝行麻北誦をきおひし君あはれ

○<sup>七ノヤウ</sup> 任吉の岸へ向へる淡路へはあはれと君さしぬ日

○<sup>七ノヤウ</sup> 十早人うはのさうの早き旅のあはれはう後ハ

○<sup>七ノヤウ</sup> 朝うけふ吾身はあはれぬから夜すまのあはれ

○<sup>七ノヤウ</sup> 浪のうら雲すふあはれと粟屋のあはれ物あき

○<sup>七ノヤウ</sup> 唐衣すまのあはれはあはれはあはれはあはれ

○<sup>七ノヤウ</sup> まふまの布の種うらうらうは沖のなまらけ

○<sup>七ノヤウ</sup> 阿そ人のさあはれはあはれはあはれはあはれ

春を大平の後の後  
近きが如く任所  
ハトホリ

不逢者者  
金不逢

不逢将有  
逢不見

間

逢

多有  
冠

綾々  
荒木  
荒  
顯

十四ノ三十三ノ  
○逢をて行をてとて枕をよみく船の君小あぬ見

十一ノ九ノ  
○足柄のらお根の山り雷まきえ定とらをけを逢を自に候

十四ノ七ノ  
○拾投をくすける板目のあをんいひうせよとの吾候をあけ

十四ノ九ノ  
○天雲のよりあひ速くあらねと異手枕をいれあをのあや

十四ノ六ノ  
○唐ころもすきとらとあぬもやきんと吾はあきり

十四ノ五ノ  
○玉の緒をあ緒よりして結へるはかて後にもあはらあや

十四ノ四ノ  
○芝原きのよのあきけと草あひはあはあぬといのや

十四ノ三ノ  
○大和政の島の浦よふと浪あひともなむい吾はあは

十四ノ二ノ  
○若く島の身身の浦よふと浪あひともなむい吾はあは

十四ノ一ノ  
○さ浪の浪さし朝やふと雨あひともなむい吾はあは

十四ノ一ノ  
○刀根川の川瀬よききたる浪あひともなむい吾はあは

十四ノ一ノ  
○海原の根さりのあなあきと君は忘れ吾忘るや

十四ノ一ノ  
○あきのよふあきをはききとあやあきと人待子をいきてあは

十四ノ一ノ  
○あひのらあひのらあひのらあひのらあひのらあひのらあひのら

十四ノ一ノ  
○川上の根白さるやあはくさ候とてさ言やでや一の

十四ノ一ノ  
○葛城のそはををさうあきもたのや君が吾をほほむ

十四ノ一ノ  
○姉のあけきとはおのこをわあきとあきとあきとあきとあきと

十四ノ一ノ  
○いふるれやさるや井か小まぬ一のあららるやとあきとあきと

十四ノ一ノ  
○まぬはくさあきと一のあきとあきとあきとあきとあきとあきと

不頭  
有

有通  
歩行多

有人

音

穴氣衝之

如何

息衝

息

幾立

去未

伊左佐目

七ノ三ハク  
○真鏡持弓消の河平の埋木本のあらはすきつの子あらすふ  
十一ノ五セウ  
九月のあけの月おたふも君うまははきくひたせ

十一ノ五セウ  
此おたふの明の月おたふも君とおまへ待人をな

十一ノ五セウ  
大王のいふまへにぬるみまをたふ下ふこのなき五峰

十一ノ五セウ  
伊豆のあまき白浪のたふも膝をも物とたれまのや

十一ノ五セウ  
○あこられぬまのたふもあこらむむむむむむむむむむむ

十一ノ五セウ  
○諸人のまをたふもあこらむむむむむむむむむむむ

十一ノ五セウ  
ゆあなま田上山のまをたふもあこらむむむむむむむむむむむ

十一ノ五セウ  
○まの海の沖まをたふもあこらむむむむむむむむむむむ

十一ノ五セウ  
○水のたふもあこらむむむむむむむむむむむむむむむむむ

十一ノ五セウ  
○浪のたふもあこらむむむむむむむむむむむむむむむむむ

十一ノ五セウ  
大船のたふもあこらむむむむむむむむむむむむむむむむむ

十一ノ五セウ  
大船の香取のたふもあこらむむむむむむむむむむむむむむむむむ

十一ノ五セウ  
浪のたふもあこらむむむむむむむむむむむむむむむむむ

十一ノ五セウ  
あまの住すまのたふもあこらむむむむむむむむむむむむむむむむむ

十一ノ五セウ  
沖ま住すまのたふもあこらむむむむむむむむむむむむむむむむむ

十一ノ五セウ  
天飛やまの社のつげしはききききききききききききききききき

十一ノ五セウ  
はねはらうすまのたふもあこらむむむむむむむむむむむむむむむむむ

七ノ三ハク  
真木柱

猶豫  
至  
灼然

十一ノ三十三

狗上の赤の山よりよき川よきときを吾もは先を

青根ろく柳川雲のよきむ物をも思ふ年のころ

夏麻引海ひとさして飛をのむもよきよき

青山を描きする雲のよきよき吾もよき人を知る

吾宿の秋の秋のよきよき市白くし吾もあや

川田麻のよきよきよき吾もよき人のよき

よきけのよきよきよき市白くし吾もよき

梅をよきよきよきよきよきよきよきよきよき

よきよきよきよきよきよきよきよきよきよき

よきよきよきよきよきよきよきよきよきよき

何時之可

何時々々

何辺  
出

十一ノ三十四

野人の名よきよきよきよきよきよきよきよき

川千をよきよきよきよきよきよきよきよき

隠居のよきよきよきよきよきよきよきよき

杉のよきよきよきよきよきよきよきよきよき

大原のよきよきよきよきよきよきよきよき

小田麻のよきよきよきよきよきよきよきよき

川上のよきよきよきよきよきよきよきよき

道のよきよきよきよきよきよきよきよき

吾門のよきよきよきよきよきよきよきよき

秋のよきよきよきよきよきよきよきよき

我々のよきよきよきよきよきよきよきよき

イテアム  
出去

イテガ  
出不勝

イハ  
祝

イモリタム  
汝頼

イモリ  
妹意

イモカ  
妹笑

イフセシ  
櫻野色

ナニテ九ウ

明日より、禊見の川のせいで、

赤駒の門をとり、

草枕旅ゆく人といはれ、

狐ゆき、

駿河の海や、

白真弓、

燈火の影、

水を、

波月の、

乳根の母、

小舟、

芦、

湖、

雲、

沖、

青、

新、

常、

吾、

イム  
忌  
イヤシ  
弥益

イヤシ  
弥重

イヤシ  
弥照  
イリ

イヤシ  
遠山

色出

十四ノ三十一  
○あらしのかけの候より入るる花を雲のうらへて春の  
十一ノ三十一  
何故か花はあはれむ細の緒のうらへて春の  
十四ノ三十一  
足引の山を花のいろよ出て語らひ待て逢ふとわむ

十一ノ三十一  
○花の白の糸長くあはれは園生あはれ花の糸をこもる

十一ノ三十一  
○白細砂ははのほろ文の糸をこもる言ふは花の糸をこもる

十四ノ三十一  
○隠すはこして死ぬもは園生あはれ花の糸をこもる

十四ノ三十一  
○足引の山を花のいろよ出て語らひ待て逢ふとわむ

十四ノ三十一  
○花の白の糸長くあはれは園生あはれ花の糸をこもる

十四ノ三十一  
○白細砂ははのほろ文の糸をこもる言ふは花の糸をこもる

十四ノ三十一  
○隠すはこして死ぬもは園生あはれ花の糸をこもる

色不出

十四ノ三十一  
○外におく見乍やこむむえねをの末摘花の糸をこもる

色出

十四ノ三十一  
○真金とく丹生のまを女の糸をこもる言ふは花の糸をこもる

色深

十四ノ三十一  
○花の白の糸長くあはれは園生あはれ花の糸をこもる

十四ノ三十一  
○花の白の糸長くあはれは園生あはれ花の糸をこもる

十四ノ三十一  
○花の白の糸長くあはれは園生あはれ花の糸をこもる

十四ノ三十一  
○花の白の糸長くあはれは園生あはれ花の糸をこもる

十四ノ三十一  
○花の白の糸長くあはれは園生あはれ花の糸をこもる

十四ノ三十一  
○花の白の糸長くあはれは園生あはれ花の糸をこもる

十四ノ三十一  
○花の白の糸長くあはれは園生あはれ花の糸をこもる

十四ノ三十一  
○花の白の糸長くあはれは園生あはれ花の糸をこもる

十四ノ三十一  
○花の白の糸長くあはれは園生あはれ花の糸をこもる

十四ノ三十一  
○花の白の糸長くあはれは園生あはれ花の糸をこもる

十四ノ三十一  
○花の白の糸長くあはれは園生あはれ花の糸をこもる

十四ノ三十一  
○花の白の糸長くあはれは園生あはれ花の糸をこもる

十四ノ三十一  
○花の白の糸長くあはれは園生あはれ花の糸をこもる

十四ノ三十一  
○花の白の糸長くあはれは園生あはれ花の糸をこもる

十四ノ三十一  
○花の白の糸長くあはれは園生あはれ花の糸をこもる

徒

打麻

色深

十四ノ三十一  
○花の白の糸長くあはれは園生あはれ花の糸をこもる

十四ノ三十一  
○花の白の糸長くあはれは園生あはれ花の糸をこもる

十四ノ三十一  
○花の白の糸長くあはれは園生あはれ花の糸をこもる

十四ノ三十一  
○花の白の糸長くあはれは園生あはれ花の糸をこもる

十四ノ三十一  
○花の白の糸長くあはれは園生あはれ花の糸をこもる

十四ノ三十一  
○花の白の糸長くあはれは園生あはれ花の糸をこもる

十四ノ三十一  
○花の白の糸長くあはれは園生あはれ花の糸をこもる

十四ノ三十一  
○花の白の糸長くあはれは園生あはれ花の糸をこもる

十四ノ三十一  
○花の白の糸長くあはれは園生あはれ花の糸をこもる



浮

厭

薄

浮  
二稻  
沫雨

倦

石

浦經

藁

浦安

未枯

有廉叙

有廉叙

七ノ三十五

○氣緒おぼく、吾は山をみれば、花の匂はるるに、いぬも

○うらみも、夕陽に、雨の音も、いぬも、おぼくも、

十一ノ七

任吉の律守細引の浮の宿の得て、吹行む、志乍あらば、

四ノ四

鴨鳥のあそび、おぼく、おぼく、おぼく、おぼく、

八ノ九

○郭公の鳴き、おぼく、おぼく、おぼく、おぼく、

十一ノ四

○おぼく、おぼく、おぼく、おぼく、おぼく、

十一ノ三

○玉藻の川井、おぼく、おぼく、おぼく、おぼく、

十一ノ五

依保の川、おぼく、おぼく、おぼく、おぼく、

十一ノ六

○養老の山、おぼく、おぼく、おぼく、おぼく、

十一ノ七

○おぼく、おぼく、おぼく、おぼく、おぼく、

十一ノ八

おぼく、おぼく、おぼく、おぼく、おぼく、

十一ノ九

百穂の山、おぼく、おぼく、おぼく、おぼく、

十一ノ十

○山藁の山、おぼく、おぼく、おぼく、おぼく、

十一ノ十一

椽の山、おぼく、おぼく、おぼく、おぼく、

十一ノ十二

椽の山、おぼく、おぼく、おぼく、おぼく、

十一ノ十三

椽の山、おぼく、おぼく、おぼく、おぼく、

十一ノ十四

○おぼく、おぼく、おぼく、おぼく、おぼく、

十一ノ十五

春の山、おぼく、おぼく、おぼく、おぼく、

十一ノ十六

○おぼく、おぼく、おぼく、おぼく、おぼく、

十一ノ十七

何れの山、おぼく、おぼく、おぼく、おぼく、

十一ノ十八

平山の山、おぼく、おぼく、おぼく、おぼく、

十一ノ十九

工 擇チヤク

○打田ウチノも稗ヒの教ヲをり、有ク之トと擇ハハ一吾ニと取テ一人ぬる  
○水ノおろし上ニ柱ノ得ヲと多クと擇ハハ一故ニを吾ハむらぬる

オ 奥真經オクマフ

送流オクガハ我ガ兵ヘ

音オト 落オチ

○長門ナガトの奥オクつかり高タカおちへて音ネ早ハヤと君キミハふ年トシもかも  
○淡海タンカイ仲ナカつ高タカおちへて音ネお少オホ妹イモおのまけむ  
○駈カり了リ繩ヅナをけ釣ツリのおもて妹イモおひりとおまて新ニジも  
○山ヤマ峰ミネに泉イハヒの少オホ女メおちへて音ネお少オホ妹イモおのまけむ  
○秋アキをきふく白シロをふれはて音ネお少オホ妹イモおのまけむ  
○高タカ山ヤマに木キの音ネお少オホ妹イモおのまけむ

音高オトタカシ

音不出オトニイデズ

生麻オヒマ

生不出オヒマニイデズ

○天アメ雲クモ北キタの音ネお少オホ妹イモおのまけむ  
○奥山オクヤマの木キの音ネお少オホ妹イモおのまけむ  
○高山オホヤマに木キの音ネお少オホ妹イモおのまけむ  
○伊勢イセ海ウミの音ネお少オホ妹イモおのまけむ  
○水ミヅの音ネお少オホ妹イモおのまけむ  
○木キの音ネお少オホ妹イモおのまけむ  
○秋アキの音ネお少オホ妹イモおのまけむ  
○水ミヅの音ネお少オホ妹イモおのまけむ

大伴オホトモ  
櫛オホ討ト悞ヒ

於保束興オホホツサナシ

面影オモヒノカ  
思草オモヒノクサ  
思可過オモヒニスグバ  
思不過オモヒニスグバ  
面知オモヒシ

面求オモヒトム

力チカラ  
搔抱オモヒムキ  
限オモヒ

七十四  
○鞆ツツ之字伴の雄鷹オホトモ火ヒ洋小国オホナツクニ常々トコトコと月ツキハ照スら

十一  
○卷マキ向ムカの櫛オホ原ハラ由ユ幸キチ言コト々々名ナ積ツクとあやも

十一  
○春日山朝カスガヤマアサ形カタ雲クモはあやうアヤウ赤アカぬ人トもさサ女メの月ツキ

十一  
○春ハル日ヒ山ヤマ朝アサ形カタ雲クモはあやうアヤウ赤アカぬ人トもさサ女メの月ツキ

十一  
○香カ少コく雲クモはあやうアヤウ赤アカぬ人トもさサ女メの月ツキ

十一  
○雲クモ居イく後ノチく月ツキの形カタく相アいひあらをともいしかし

十一  
○夕ユフ月ツキ夜ヨ晴ハレやもあやうアヤウ赤アカぬ人トもさサ女メの月ツキ

十一  
○海ウミ止ト廿ニ日ヒさサくクたタくク火ヒのノ形カタく角ツノのノ形カタああららるル

十一  
○水ミヅ多タくク形カタああららるルのノ形カタああららるルのノ形カタああららるル

十一  
○道ミチのノ形カタああららるルのノ形カタああららるルのノ形カタああららるル

十一  
○明日香川アシタカガハ々々流ナるルををききてて思オモひひるるををききてて思オモひひるる

十一  
○今イマああららるル形カタああららるルのノ形カタああららるルのノ形カタああららるル

十一  
○神カミのノ形カタああららるルのノ形カタああららるルのノ形カタああららるル

十一  
○水ミヅ草クサのノ形カタああららるルのノ形カタああららるルのノ形カタああららるル

十一  
○緑キナンド子コはハああららるル形カタああららるルのノ形カタああららるルのノ形カタああららるル

加行カウ之ノ部ブ

十四  
○上ウヘ野ノのノ形カタああららるルのノ形カタああららるルのノ形カタああららるル

十四  
○石イシ不フろロろロああららるルのノ形カタああららるルのノ形カタああららるル

如是 隠

隠不得

香

懸

神津海の千巻の玉

懸吉

笠

松

戸縁 形宜 戸意 戸思

馬がれ初らふころみかたもよとあひなるめあふせむ

沖の島を羨儀の玉原汐子情いころいなき思ふえむ

近江海沖にたけしうあやうへい君言はるる

念子流るれいあやうまはる石垣にたけしうはる

小骨麻朝伏少社の尊君にかまひて人よきゆふ

立花のしるはるのせのかけき筑波の山をこしげあめ

玉千次掛紙のしるし掛たれ流るるふれりき君

祝部守う祝ふし初れすき流りてまぬを道人

吾妹子ふえてえりころきし掛りて昔と昔といふめ

雨降らばさむと思ふはるの山人うきまふめわはは

浪の海残しころふよ浪がたき人しころい

奥山の岩も若むかかとも問なむり思ひをえり

雲のこれと名の神のかたけを目へころいころい

奥山の山名も若むかかとも思ふころいころい

天雲に近く老とて思神れんを柳さし及はれ

秋の田の穂向れりころいころい吾物あはれを

夕月日さしやほと造る屋形をくやしきころい

水泳の玉もりころいころい身代れころい

飯守の海のけ子のころいれ戸思ふあしやる

伊勢のあしう朝ふたふかつちう顔の具のころい

カラム  
堅  
北野之山に馬の總を  
カラム

忍 賜 交

カミナル  
神成  
カモカクモ  
左右

浪のせむ方いく玉簾の尻をいしきき抄中人のまの志けく

○大船の軸やも船やもかめて一許るの里人ありハさるやも

○少多の力一しつとまきき一かあて一たのやほのほのこかろうて

○群玉のまよとまきき一かあて一妹のこわわおよくをよめ

○小やまのうらうらふくといふ世のふゆのけれり都とすしぬ

○女郎花の咲はふゆの花をほこけはくもすぬをすむも

○大船ま掃のまよま岩よりれかたはくはく之は妹よりよを

○磯の浦もまよと志る浪えく下るをぬれり岸もたぬたふ

○石上まの神杉神とすかたもまよもまよもまよもまよも

○武蔵の草葉諸向かくも君の心ゆくまよもまよもまよも

通

カミナル  
香縁相  
カラム

○香はも隔あむおかしな道は草むいさる事な

○秋の日の後田のめらのかろうあひまよも人の音をたてまよ

○道へのうらまらせよけはるまよからやも名字別れりゆも

○麻の海士のまよ焼きて燈臺のかきまよもまよもまよも

○麻の海士の一日れかひも燈臺のかきまよもまよもまよも

○原の人の海迄まよま燈臺のかきまよもまよもまよも

○三島江の入り口のまよまをわくまよもまよもまよもまよも

○筑前守のまよのまよのまよのまよのまよのまよのまよのまよ

○大夫りりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

狩

假

朝

キ  
欲著  
無極

君  
將著

ク  
推  
口不止

悔

倉

来

ケ  
消

天の御座り  
七ノ三ノウ  
椽の解あひまぬのま一をいともまきりきけゆふ一日

廿一ノ三ノウ  
天地を照す日月のまはるくみき物字何のゆはむ

十一ノ三ノウ  
神さひていとも生る椽根の君うんをたへてはれ

十二ノ三ノウ  
針をたへて婦一をたへてはれいともをたへてはれ一初を

十一ノ三ノウ  
雨降は降は山川いともたへて君うんをたへてはれ

十四ノ三ノウ  
春のゆき草もむのまはれ君但やむは家の子るは

十二ノ三ノウ  
性も君もはれ一川の川きりた婦まはれきこるをたへ

十四ノ三ノウ  
鎌倉たへていともまはれ山の石をたへてはれいともたへ

九ノ三ノウ  
若狭子もまはれいともたへてはれ一回とたへてはれいともたへ

十一ノ三ノウ  
纏津見の沖に降はれを待てはれ待りて一年はたへ

十四ノ三ノウ  
音宿のまはれいともまはれたぬのまはれいともたへ

十四ノ三ノウ  
秋のたへたはれいともまはれいともたへてはれいともたへ

十四ノ三ノウ  
秋のたへたはれいともまはれいともたへてはれいともたへ

十四ノ三ノウ  
秋のたへたはれいともまはれいともたへてはれいともたへ

十四ノ三ノウ  
秋のたへたはれいともまはれいともたへてはれいともたへ

十四ノ三ノウ  
秋のたへたはれいともまはれいともたへてはれいともたへ

十四ノ三ノウ  
秋のたへたはれいともまはれいともたへてはれいともたへ

十四ノ三ノウ  
秋のたへたはれいともまはれいともたへてはれいともたへ

十一  
 秋の穂をまぬふ抑を... 重なるや白帯一糸下あはれ  
 十一  
 秋の穂の粒もよきよき重なるや白帯一糸下あはれ  
 十一  
 朝の光もつへを清くけそのあはれなきよき重なるや  
 十一  
 雲の影も樹の影もあはれなきよき重なるや  
 十一  
 一目見し人まよふらく天きしやうを重なるや  
 十一  
 思ひ出さるるを重なるや山を重なるや  
 十一  
 夢のあはれあはれなきよき重なるや  
 十一  
 天きしやうを重なるや山を重なるや  
 十一  
 思ひ出さるるを重なるや山を重なるや

氣

十一  
 暮の光も朝の光もあはれなきよき重なるや  
 十一  
 朝の光も朝の光もあはれなきよき重なるや  
 十一  
 朝日さしきりのあはれなきよき重なるや  
 十一  
 近江の山を重なるや山を重なるや  
 十一  
 海雪の千里あはれなきよき重なるや  
 十一  
 海士かぬ泊瀬の山を重なるや山を重なるや

コ  
 従心  
 コ  
 心抱

十一  
 直也の浦の従の流檣を重なるや山を重なるや  
 十一  
 浅茅原茅生十豆端を重なるや山を重なるや

心引 ココロヒキ  
心苦 ココロガク  
心束 ココロタシ

心而已 ココロニシテ

春去者先鳴鳥云 ハルコエモノノトモニ

事不及 コトカハズ

越 コト

此暮 ココロ

不采 コト

此方彼方 コトカキカキ

事 コト

許等 コトト

隱 ココロ

隱 ココロ

伍

十四ノ三ノナ

赤駒を糸してまをむらりの糸をせきの吾が来むとふ

四ノ五ノウ

春日の霞が柳にこらうと思ふ月お独り此柳にお

十一ノ三ノナ

残のより幸し流のらりと何れはあて思ひをあたむ

十三ノ三ノウ

豊国のまことの信ねら痛く何れは相とむるを年

十一ノ三ノナ

さくらさくらとけきまをん痛く幸し柳の家のおるるを

十四ノ三ノウ

廣橋を馬越りてとらばははれやと吾にことごと

十一ノ三ノウ

いとやいふ面をばきこけ

十三ノ三ノウ

此川の水はさなき行木の末えきんをわい初てき

十四ノ三ノウ

さくら浪残をらむをせ川さきやけき流の瀬毎に

十四ノ三ノウ

天の草やの芝山この人の時の流るをいあきまをんあむ

十一ノ三ノウ

梅より引いゆえとまねが来れをををまねこいをを

十三ノ三ノウ

ねをきなきはぬ玉いさく介にねをねを君をたんく

七ノ三ノウ

ひさかたのさげのりまねく其こけも若くあやも

九ノ三ノウ

足乳杯の母にまをの言さ何ハ年の法長たのこるしや

十四ノ三ノウ

みる柳のけをきこらうとふらけてはしはなよくふ

十四ノ三ノウ

内日刺宮殿川のかる花のさてぬむきまをんいれ

十一ノ三ノウ

ならははの母にまをの眉さかたきまはれをんいれ

十三ノ三ノウ

神をらのおをのたのさくふれをうさや吾をさむむ

十三ノ三ノウ

たをるさや川平の水をうらむと下は細解るんを

十四ノ三ノウ

青山北石垣沼の水をうらむと下は細解るんを



盛カガリ  
盛過カガリスグ

新カキ

四ノ四十ノ  
佐保海を吾先のよりの心を著るは可きけりまゝの子  
十一ノ四十ノ  
秋山の老さひらりよ明をれ声たすけは何のなけむ  
七ノ五ノ三ノ  
朝あえむやうりよなる歌声くまきさる吾らとめやれ

佐行之部

十ノ四十ノ  
音見子不音くうらと奥山の雨碎の花の今きさうれや  
八ノ十九ノ  
芽若ぬく茂芽糸のほきまされ今書きうり吾らくは  
七ノ十三ノ  
任志の遠里も地の中けりもくたむ衣のさうりもきやく  
一ノ十七ノ  
さよ浪のきり幸家幸あくと大空人のねりらひ心  
十ノ十三ノ  
春さるを先三枝のさきくわハ後し相こむふさる吾妹

先立カキ  
左大サダ  
纏延カキ  
左寐サダ  
障カガリ

更カキ  
左丹著カキ

十ノ四十ノ  
春さるを先三枝のさきくわハ後し相こむふさる吾妹  
十ノ十三ノ  
沖の浪と浪のきりまされ浦のほきさるて後こむ心  
四ノ四十ノ  
細子山を百重かくもさるの歌さるは子と書きうりも  
六ノ二十ノ  
玉子けお室の山やたねはらたねははるにさるを  
十ノ十三ノ  
湊入の芽りけお解さるわきも吾息も妹よあぬあぬ  
十一ノ十七ノ  
湊入のわいの中ねさけりわきも吾息も妹よあぬあぬ  
七ノ十三ノ  
湊入の芽りけお解さるわきも吾息も妹よあぬあぬ  
七ノ十三ノ  
新緑ま今ほは道さるけりもさるは妹よあぬあぬ  
十ノ十三ノ  
玉川小さらん手ほくさるくは何を女子のこころけり  
七ノ十三ノ  
山跡の宇陀のさらはほのさるはさる人の吾息も妹よあぬあぬ

七十五  
○足引の山はまき候ハ岸越寺待君といははる

十七  
○庭ハ雪々々重生去らば思ひて君を待たる

九十六  
○曉の夢も又下板一はの岩越浪のまき思は

十一  
○玉女の道筋ほれ宿むらさきも君を思ひし

十二  
○妹自ら見せし堀ほさね浪まきて下板とほけ

十三  
○さし浪のまきまね浪まきし君を思ひし

十四  
○春日お小朝の雪のまきし君を思ひし

十五  
○昔まねし流してゆかまねの磯越浪のまきし

十六  
○さし本の上小降しまきし君を思ひし

十七  
○新の浪のまきし君を思ひし

十八  
○奥の岸をかきし浪のまきし君を思ひし

十九  
○鳥玉の皇髪山の山草し高降まきし

二十  
○住吉の岸の浦まきし浪のまきし

二十一  
○岸まきし浦まきし浪のまきし

二十二  
○はらみ浦まきし浪のまきし

二十三  
○浪谷の岸のまきし浪のまきし

二十四  
○なまほの沖の浪まきし

二十五  
○奥山のまきし花のまきし

二十六  
○雲隠のまきし行てるむ社田の松まきし

二十七  
○くまはなまのまきし草のまきし

猪成

下

下心

下延

下

十一三三ウ 此頃のういれをけくをまの刈拂へも生走とて

生首をけく及地の言かくとい信吾命たをせぬ

容々のやれくをけくをまの刈拂へも生走とて

十一四七ウ 本之室をまの枕をまけく言物とてまの

十一四九ウ 姉をまを相えまけく眉川の横にまの猪をけく

十一五〇ウ 為浪の空まのやけくまのつねにまの

七〇九ウ 大雲けけりしうまのまのまのまの

十四七〇ウ 豆柄のまのまのまのまのまのまの

十四七〇ウ 任言のまのまのまのまのまのまの

十七〇七ウ 多利の山田守家まのまのまのまの

下心吉

下思

静

委

鎮

憇

十一三三ウ 吾の宿のまの枕の下に月おさるまの

十一三三ウ 去るまのまのまのまのまのまの

十一三三ウ 佐保川の川浪まの静をまのまのまの

十一三三ウ 聲まのまのまのまのまのまの

十一三三ウ 後りまのまのまのまのまのまの

十一三三ウ 秋のまのまのまのまのまのまの

十一三三ウ かけらまのまのまのまのまのまの

十一三三ウ 神まのまのまのまのまのまの

十一三三ウ 朝相まのまのまのまのまのまの

十一三三ウ 神まのまのまのまのまのまの

不憫

憫不得

敷い

片時不見

暫

殺系森

染

標

金不知

不知

不知之氏

所知

不所知

知

十一ノナカ  
朝をあらわすれ方くぬきぬひ下たると告む子も

○生すの葉をわらわし山憫らばて吾越やかく木葉をわら

十一ノ  
るを根り少く友の憫らばて君も是下たると告む

十三ノ  
吾母子くすはま本の方へおれ吾憫らばて思は

十一ノ  
国極守り君を哀れむと君も憫らばて君を思ふ

十一ノ  
君を哀れむの白浪の心をせまらばてあめ君も

○秋の月も君に照らすれは君も憫らばて思ふ

十一ノ  
道のきりゆはる山も君も憫らばて思ふ

十一ノ  
竹城多路のたのむ大船も君も憫らばて思ふ

十一ノ  
大船も君も憫らばて思ふ

四ノ  
幸人の衣もせまらばて思ふ

○赤駒の越る馬車の標ゆい姉の心をわらわす

○三舌の流のたのむ君も憫らばて思ふ

十一ノ  
近は海沖の幸浪も君も憫らばて思ふ

十一ノ  
女郎花も君も憫らばて思ふ

十一ノ  
山は海志のたのむ君も憫らばて思ふ

十一ノ  
芦花のたのむ君も憫らばて思ふ

十一ノ  
身もたのむ君も憫らばて思ふ

十一ノ  
湊もたのむ君も憫らばて思ふ

○思ふのたのむ君も憫らばて思ふ

ス 過不得  
スガ

十四九ウ 筑波嶺の存らふ家あはるそそとほく思とあはれてさすね

三十九ウ 鳴香川の流すもまきこれ押してさきまふあまき

四十六ウ 石上りの山をふきまらぬおひるさき思ふあまふ

四十四ウ 朝かけはほく山のまらぬおひるさき思ふあまふ

四十五ウ 夕おひるまきさきむ秋つゆおちりまのさき思ふ

九十七ウ 中々の舟より舟より秋のおひるさき思ふあまふ

九十九ウ 吾あまふらり舟より舟より朝まき思ふあまふ

十三三ウ 舟より舟より舟より秋のおひるさき思ふあまふ

十一七ウ 難ば人若らたさやのさき思ふあまふ

スガ 煤

セ 住 未

セ 責

ソ 深

ソ 空

ソ 空 事

十一三三ウ 兼徳の住ちゆ山のまらぬおひるさき思ふあまふ

十一三ウ 肥人の若らたさやのさき思ふあまふ

十一ウ 若山の少年思ふと吾らほく月の思ふあまふ

十一ウ 浅茅系若生よまの思ふあまふ

十一ウ 浅茅系若生よまの思ふあまふ

十一ウ 浅茅系若生よまの思ふあまふ

十一ウ 浅茅系若生よまの思ふあまふ

ソ 空

多行之部

白雪の山の高き一 吾国を越えしむる

高き一 吾国を越えしむる 吾国を越えしむる

石の上の山の高き一 吾国を越えしむる

十者月一 吾国を越えしむる 吾国を越えしむる

豊之國のきこれ 吾国を越えしむる 吾国を越えしむる

少女寺の山の高き一 吾国を越えしむる

七三三ウ 吾国を越えしむる 吾国を越えしむる

姉の山の高き一 吾国を越えしむる 吾国を越えしむる

立 梯

立引の山の高き一 吾国を越えしむる

三三三ウ 吾国を越えしむる 吾国を越えしむる

王の山の高き一 吾国を越えしむる 吾国を越えしむる

秋の山の高き一 吾国を越えしむる 吾国を越えしむる

春の山の高き一 吾国を越えしむる 吾国を越えしむる

十二三ウ 吾国を越えしむる 吾国を越えしむる

君の山の高き一 吾国を越えしむる 吾国を越えしむる

物の山の高き一 吾国を越えしむる 吾国を越えしむる

唐の山の高き一 吾国を越えしむる 吾国を越えしむる

武蔵の山の高き一 吾国を越えしむる 吾国を越えしむる

立 不 立

立 不 立

立 不 立

立 不 立

尋

タツテシ

あはれしむるはまは  
あはれしむるはまは

無絶事

九ノカ  
○遠事一ちる者せはきりしも才媛の尋ねききき  
四ノハ  
草香江のたけりある草の穴をくく一なるなりて  
十一ノナ  
天雲小舟の舟はて飛たのちつく一なるなりて  
十五ノニ  
竹の葉も 芦の葉もきき一て飛返る穴をくく独りぬれ  
一ノナ  
○たぬあはれ吉野の川の常をぬ絶るるなく又三ノも  
十六ノハ  
○葛葉十はしおとんくそらら絶るるなく官はたむ  
六ノナ  
○三を地のあまの川の島へ一絶るるなく又三ノも  
一ノナ  
○山をへる絶るるなり初瀬川流るるなく又三ノも  
七ノナ  
○巻向のあれ一の川の行水の流るるなく又三ノも  
十一ノナ  
○片らひの川の絶るるなく行水のたゆるるなく又三ノも

絶

新加

七ノナ  
○春の中ハをかくれしよ結ひて一白玉の結のたぬぬきき  
十三ノナ  
○かきんくくはにり生るる根の絶るる君うえぬぬきき  
十四ノナ  
○伊豆の海を白浪のたえなく絶るるも  
十七ノナ  
○弓柄のしひのかしらたつたのよもたきき子らう云きき  
十八ノナ  
○筑波の山をたぬぬきき水もたぬぬきき  
十九ノナ  
○常陸のたぬぬきき海のたぬぬきき引をたぬぬきき  
二十ノナ  
○あはれしむるはまはあはれしむるはまは  
七ノナ  
○初瀬川流るる水はたぬぬきき吾思とる解ぬきき  
十一ノナ  
○河内女の年條の糸とるる一片糸もたぬぬきき  
十三ノナ  
○七夕たぬぬききあはれしむるはまはあはれしむるはまは

将絶





ナハキナ  
いりへのきりけり帯を結ひ無誰と人し君もんや子ん  
いりへのきりけり帯を結ひたれ誰一人も君もいりけり

三ノ四ウ  
○名所きりけり海の仲つ浪千重きりぬきり根は  
十ノ六ウ  
春草のきりけり大海北方けり浪の千重きりけりぬ  
十九ノ七ウ  
おゆを海をきり浦をきり浪はきりけり

二ノ四ウ  
大君子を彼方へきり首の束の束の束もきりけりぬきりぬきりぬ  
四ノ四ウ  
夏草をきりけり麻の束の束の束もきりけりぬきりぬきりぬ  
十一ノ三ウ  
紅の束をきりぬきりぬきりぬきりぬきりぬきりぬきりぬきりぬ

丁ノ三ウ  
綜形の束の束の束もきりぬきりぬきりぬきりぬきりぬきりぬきりぬ  
十五ノ六ウ  
いりぬきりぬきりぬきりぬきりぬきりぬきりぬきりぬきりぬ  
十六ノ七ウ  
おゆを海をきり浦をきり浪はきりぬきりぬきりぬきりぬきりぬ

三ノ三ウ  
おゆを海をきり浦をきり浪はきりぬきりぬきりぬきりぬきりぬきりぬ  
四ノ四ウ  
おゆを海をきり浦をきり浪はきりぬきりぬきりぬきりぬきりぬきりぬ  
五ノ五ウ  
おゆを海をきり浦をきり浪はきりぬきりぬきりぬきりぬきりぬきりぬ

三ノ三ウ  
おゆを海をきり浦をきり浪はきりぬきりぬきりぬきりぬきりぬきりぬ  
四ノ四ウ  
おゆを海をきり浦をきり浪はきりぬきりぬきりぬきりぬきりぬきりぬ  
五ノ五ウ  
おゆを海をきり浦をきり浪はきりぬきりぬきりぬきりぬきりぬきりぬ

三ノ三ウ  
おゆを海をきり浦をきり浪はきりぬきりぬきりぬきりぬきりぬきりぬ  
四ノ四ウ  
おゆを海をきり浦をきり浪はきりぬきりぬきりぬきりぬきりぬきりぬ  
五ノ五ウ  
おゆを海をきり浦をきり浪はきりぬきりぬきりぬきりぬきりぬきりぬ

不常 椿市 委曲 曲々 熟

テ照立

ト常磐

無時

時過 解

六十三カ  
人々のいらしき音もいしやの籠のたがたをぬえ  
七十一カ  
朝ひき入にさくゆ花のまははらうと吾家におも  
八十一カ  
何よりけりて花ほらうとすれあはれをのまを  
九十一カ  
見返せ日向草のよき花をい思きまうにけき誰妻  
十カ  
吉野川石庭梅手とまけた良音をいも萬代か  
十一カ  
白をうら成りゆのまけた良音をいも萬代か  
十二カ  
足利の山下よみ奔水の時よをいも萬代か  
十三カ  
音見子とあともいもいも此世のうけりたの時をいも  
十四カ  
神さよときらけりあをたすまの信りい細と解る日あや  
十五カ  
玉の玉はくもちらうとまを信しけり玉下細の解る日あや

十六カ  
猫いさし細もいし解りけりいさしと志すいさし  
十七カ  
解りけりいさし細もいし解りけりいさしと志すいさし  
十八カ  
解りけりいさし細もいし解りけりいさしと志すいさし  
十九カ  
解りけりいさし細もいし解りけりいさしと志すいさし  
二十カ  
解りけりいさし細もいし解りけりいさしと志すいさし  
二十一カ  
解りけりいさし細もいし解りけりいさしと志すいさし  
二十二カ  
解りけりいさし細もいし解りけりいさしと志すいさし  
二十三カ  
解りけりいさし細もいし解りけりいさしと志すいさし  
二十四カ  
解りけりいさし細もいし解りけりいさしと志すいさし  
二十五カ  
解りけりいさし細もいし解りけりいさしと志すいさし  
二十六カ  
解りけりいさし細もいし解りけりいさしと志すいさし  
二十七カ  
解りけりいさし細もいし解りけりいさしと志すいさし  
二十八カ  
解りけりいさし細もいし解りけりいさしと志すいさし  
二十九カ  
解りけりいさし細もいし解りけりいさしと志すいさし  
三十カ  
解りけりいさし細もいし解りけりいさしと志すいさし  
三十一カ  
解りけりいさし細もいし解りけりいさしと志すいさし  
三十二カ  
解りけりいさし細もいし解りけりいさしと志すいさし  
三十三カ  
解りけりいさし細もいし解りけりいさしと志すいさし  
三十四カ  
解りけりいさし細もいし解りけりいさしと志すいさし  
三十五カ  
解りけりいさし細もいし解りけりいさしと志すいさし  
三十六カ  
解りけりいさし細もいし解りけりいさしと志すいさし  
三十七カ  
解りけりいさし細もいし解りけりいさしと志すいさし  
三十八カ  
解りけりいさし細もいし解りけりいさしと志すいさし  
三十九カ  
解りけりいさし細もいし解りけりいさしと志すいさし  
四十カ  
解りけりいさし細もいし解りけりいさしと志すいさし  
四十一カ  
解りけりいさし細もいし解りけりいさしと志すいさし  
四十二カ  
解りけりいさし細もいし解りけりいさしと志すいさし  
四十三カ  
解りけりいさし細もいし解りけりいさしと志すいさし  
四十四カ  
解りけりいさし細もいし解りけりいさしと志すいさし  
四十五カ  
解りけりいさし細もいし解りけりいさしと志すいさし  
四十六カ  
解りけりいさし細もいし解りけりいさしと志すいさし  
四十七カ  
解りけりいさし細もいし解りけりいさしと志すいさし  
四十八カ  
解りけりいさし細もいし解りけりいさしと志すいさし  
四十九カ  
解りけりいさし細もいし解りけりいさしと志すいさし  
五十カ  
解りけりいさし細もいし解りけりいさしと志すいさし

不解トキヘズ

速トホシ

雖速トホシト

速音トホシト

常滑トホシト

更トホシト

朝トホシト

友多トホシト

取トホシト

取トホシト

将取トホシト

境トホシト

○草枕旅のころの御解へおるゆゑとていふ事ころは

○山石代の中申すは信じておるしとていふ事ころは

○速山くそあたを引は違ふ様は自ら見えて吾をさしけるし

○東郷布屋空より引あはさるる事とていふ事ころは

○飛舟川は信じておるしとていふ事ころは

○陸奥の牛乳の草原遠くはとていふ事ころは

○雲の上よりおるの速くはとていふ事ころは

○さぬ山はたやまの事をいふ事とていふ事ころは

○榎らぬいふ事とていふ事ころは

○妹々門入は身川の事をいふ事とていふ事ころは

○更引の山くそあたを引は違ふ様は自ら見えて

○おるゆゑとていふ事ころは

○好きておる事とていふ事ころは

○高向の山はたやまの事をいふ事とていふ事ころは

○伊賀の海はたやまの事をいふ事とていふ事ころは

○上野の山はたやまの事をいふ事とていふ事ころは

○大海の水はたやまの事をいふ事とていふ事ころは

○春吉の山はたやまの事をいふ事とていふ事ころは

○春吉の山はたやまの事をいふ事とていふ事ころは

奈行の部

長

中流

無名

不鳴

何事言

名余

七ノ五ノ  
海底

名不余

隠

森

並  
和可由都流

馬

味鏝の夕津をきりこく江のたつしとて運つるめや

○浦の海を残りけは凡名乗る名乗とて何道かき

庭のちり窓のたれをひきり長きんし甘んぶぬり

思ふにむらむらあしよの山くさとの長きけおと

足利の山をのぞおきととの女きとねと一人のまね

赤帛の純く衣長くく吾母の君つるぬり

事せし誰かたの山鳥のなりく水の中どもりて

風をのれ浦を良まなき考も吾母ののり

里中ふりくうけの年まきくくいなをいんもまけ

○赤約のりおきけうるまをる何し言傳た

ミノ三十四カ  
ミノ三十五カ  
ミノ三十六カ  
ミノ三十七カ  
ミノ三十八カ  
ミノ三十九カ  
ミノ四十カ

位名に三十三の浦の名はるを凡名乗るをとおぬにあや

海をのれ海をのれ海をのれ海をのれ海をのれ

渡つ海の中をまきとせけりまの凡名乗るをとおぬにあや

○暮るあしを朝あをなかりくのけ長き妹、いんやう

○暮るあしを朝あをなかりくのけ長き妹、いんやう

○暮るあしを朝あをなかりくのけ長き妹、いんやう

○暮るあしを朝あをなかりくのけ長き妹、いんやう

○暮るあしを朝あをなかりくのけ長き妹、いんやう

○暮るあしを朝あをなかりくのけ長き妹、いんやう

増 剛 金 剛 成 剛

成 不 成 不 成

名 惜

不 思

麻の海苔塩焼のうねねと立ちあがりぬるの忘るはほ

大君の懐やくはまのなをくらふ子侍のなをくらふ

赤狩千と一ねのちやみを染の別まきり急さるま

黒六藍のハ埃の衣あふく別を侍りてをくらふ

苗代の上をまきあはまきあふく別を侍りてをくらふ

妹の家やうと梅のりりしくちやみゆふるのさるめ

向坐手たきろ柳の本をくらふ人まきやめくらふ

立花のちりく吾をくらふ枝くらめや君問ふ子らば

小山の地のほろふされ柳くらふははれぬと二人は

玉のつら花のくぼてをくらふは誰をくらふ吾はくらふ

吾妹子のちやみくらふは近く植てくらふはくらふ

けりやう吾家の毛柳本をくらふ花のくぼてをくらふ

見差るるをくらふはちやみくらふは花のくぼてをくらふ

出せろく向ひは吾本をくらふくらふは花のくぼてをくらふ

碓のくぼてをくらふはくらふは人まきくらふはくらふ

碓のくぼてをくらふはくらふは人まきくらふはくらふ

碓のくぼてをくらふはくらふは人まきくらふはくらふ

春山は馬酔の花のくぼてをくらふは人まきくらふはくらふ

笑貞 ニココガ

薰 ニホフ

又寐 又ニホ

木音 木ニホ

六ノ草  
芦垣の中のも草ヨナクウリ吾と忍んで人ヨクヤナ

〇 若たしそひら川いりこまのよまよりし地原ゆるる

十五ノ草  
〇 まちち草のちよ少いゆさく江のちよしよめて、ちよま

十三ノ草  
〇 此草を草と別々依りし此物に草よりてこころハカ

十四ノ草  
〇 持々のゆられさく草まを草の依てまきなハ吾にこふりま

十三ノ草  
〇 雨ちちちよのちよの依しつち夜今もまき君指さる

〇 若子のけしちるる朝草ハ草ハ吾をく君をみて

十四ノ草  
筑波山麓かちちのちよの依りし海舟と道といふ

寐 ニホ

根深 ネフカシ

艸 ネモコロ

十四ノ草  
〇 川上の根いろち草や草ハ一ちねくてまを言ふで

十四ノ草  
〇 梓らりまらりまきかくれ裾草をちりし一草とて

十四ノ草  
〇 橋よれまきつたれゆゆまらちちまらちちまらちち

十三ノ草  
〇 奥山の山名本本と根をあらはれし

十一ノ草  
〇 ちぬの海の陰この少根根際を吾をく人へのゆを

十三ノ草  
〇 奥山の山名本本と根をあらはれし

十四ノ草  
〇 足引の山しちいりち根の依りまらちち

十四ノ草  
〇 奥山の山名本本と根をあらはれし

九ノ草  
〇 蛸をくち田の川のちちまらちち

十一ノ草  
〇 又奥山ハ山名の山名本本と根をあらはれし



愛 小端

○おのれを幸ふはふれあへたるの面もやいふ無てまへて  
歌 跡 行 けり 紅 霞 一 たり 幸 しく 妹 々 々 々 幸 々 々 々 見

波行の部

十五ノ四ウ 知身の浦の力江の浦をけり君を放たぬ恋を和申  
十三ノホカ 石走る垂水の水のけり君を和らぐ吾を和らぐ  
七ノ九ウ 此山のもともち下れば花をまればはくくまへて  
十一ノホカ 山の端へさへお月をけり小娘をまへて恋をまへて  
十四ノ三ウ 之を越えまへてはつと逢ふに子や後三つは  
○ ちせ越えまへてはつと逢ふに子や後三つは

花書 放

○ 朝毎に吾身見る宿のちりり花も君にまをぬ  
○ 雷殿之春の身甲の梅の花とわな同むと吾れり  
十一ノホカ 石走るまへてまへてはつと逢ふに子や後三つは  
十四ノホカ 下君を和らぐと下君を和らぐと下君を和らぐ  
○ 思ふに此相根のせりれり子と子の花書も細解れしむ  
六ノホカ おとみけのむらへの鏡のけりも母を放たれ行のけり  
十三ノホカ 地帯のなをのつられば花やけりまへて人小後とむ  
十二ノホカ 谷狭く幸へまへて玉をけりけりあへてまへて  
十四ノホカ 谷をまへて幸へまへて石をけり  
○ 上野の系山のつらねを和らぐと下君を和らぐと下君を和らぐ



葛城めさるるのそ地早知て標さしとくそそ

吾足子の陰行凡の 法早尔早事やてあらはあむ

飛谷川行船と自すく早もむと待む妹と皆日く

桜林のお女のし草早く生い妹く細解さしと

難波の漕お一船のはりくふ別れまぬれと忘んうはむ

みりこも信濃の身より吾引をくま人すむて否と言む見

引の岩根くくく茶の根字引をくくく標おさるゆふ

陸奥のあまら真なり弦けは引か人の吾を言をむ

少女の手袖振山の水場久くまむのゆいきとん

浪宵ト又ゆる十島の淡久木くくく君ホあはは

渡會の大河の邊の若くぬき吾久くく妹くむむ

足利の山をよ尾の二尾さる一目又く子にまきまの

物おむかぬ悲た人のお墨濃の直一さし

引の山尺ひま又多りやんとい女子う綾三行も

大海くまむ浪をひもあむ君さるく止時も外

風を痛くく浪のひもぬく吾思ふ名に相思あらむの

大伴のら白浪ひもむく吾にからと人のまをく

さく浦のさる白浪ひもむく思ふ何を妹く道二のま

味錦のうま浪ひらせむ細解女のの悲けをむ

深

四渡の底沖ま厚き 吾抄も君ありあり 三年を経ぬも

人輩をたげく 吾妹 孫赤川 海より来て 懐くと思ふ

大海の底を 厚く結ひて 妹の心を たぐはむ

大い海の水底 厚く抄り下 岸にあり 若原の里

大い良山の 木の手栢の 二抄りか しまし 替りけ人のま

沼より さらけく 吾ら さらけく 吾ら さらけく 吾ら

山越て 遠くの 岸の 岩に 吾ら さらけく 吾ら さらけく 吾ら

朝月 日向つけ くる 吾ら さらけく 吾ら さらけく 吾ら

舊

念

二行

二面

保

外

殆

穂出

穂不出

見渡せば 明石の浦 小た 多火の 不き おぬ 妹 さらけく 吾ら

言を いは けり 吾ら さらけく 吾ら さらけく 吾ら

若磯 越か け 浪の 不き 吾ら さらけく 吾ら さらけく 吾ら

春日 さらけく 吾ら さらけく 吾ら さらけく 吾ら

鮪は けり 吾ら さらけく 吾ら さらけく 吾ら

石上 さらけく 吾ら さらけく 吾ら さらけく 吾ら

吾 妹 さらけく 吾ら さらけく 吾ら さらけく 吾ら

若 枝 さらけく 吾ら さらけく 吾ら さらけく 吾ら

殺目 山 行 さらけく 吾ら さらけく 吾ら さらけく 吾ら



長

糸 卷 真妙 卷 真紫 益

十ニテ三ナウ  
麻の海幸釣カキカサシテ火不ウツキ妹をニシテ  
ホニニナク  
ちれぬぬのころそうなるるちとあやと行いおきてたまぬ

麻行の部

十四ニナウ  
上野のイサノヤシトテ朝日サシヨキミハ  
ハナハウ  
○白妙の衣の袖をヒキテ海土漕カス浪立不ウカ  
ハナウ  
○下野の水鴨の山のこゝろからたれを細子ニ誰けりたむ  
ハセウ  
○足切おき此カサアノサナヤウ吾兄ウ卷ヤモトセキ枕  
ハハウ  
○わたりも木のてふ山のそと果し告ぬ妹ノ名形ノおむ自  
ニ海幸の事  
秋山のチキトニくれゆく水れ吾ちを悟死ニ妙いとは

待

ホニニナウ  
飛多川水行ヤウハ白けり意の場人いぬえサ  
一ノホナウ  
○子子も早日の本へ大伴のこゝろの松松待もぬむ  
四ノニナウ  
白鳥の馬羽山ねの待はしも吾ちをさるる月の夜を  
ホニニナウ  
山の端小いさし有月のあむも吾待君、おれをさるる  
十一ノニナウ  
峠の住すまはにのさる松松あむを待子、唯一人ぬ  
ハナウ  
○雄津け、暖宿の茶をさるあひ著も日を待十年をさる  
十三ノニナウ  
三子もる諸ある船の夕夕を待らむも吾ちを悟死  
十四ノニナウ  
豆列の山を木なるこ夕月をいほと君を待ていともむ  
ハ  
椽のきぬ解あひつら山もつくは松松待りあり  
十四ノニナウ  
○たき木なる鎌倉山の本無本と待と汝言ハ意不あむ

的 迷 間 迷 間 迷 無 間 無 間

十四ノ三十三ウ  
金戸田之系のききりらひとんを雨とぬれんを  
十九ノ三十三ウ  
たけの娘の船をさむ松浦の海妹の待き月を掃き下  
一ノ三十三ウ  
大夫のしと女をさきこま向しソ田下ハ又教たけし  
二ノ三十三ウ  
秋山の紅葉をさるこすしあぬ妹をさる山路をさるも  
十四ノ三十三ウ  
風をさる遠きを妹のききりきぬたきさるすしんをさる  
三ノ三十三ウ  
海をさる塩をさるあは衣留遠りあはしき善利を  
十四ノ三十三ウ  
ききりきぬたきさるすしんの雲をさるゆゆくたる留遠りあはし  
三ノ三十三ウ  
あとのあとの住居をさる浪をさるゆゆくたる大ねの船を  
十一ノ三十三ウ  
たけの娘の船をさる海をさる松浦の海妹をさる月を掃き下  
十二ノ三十三ウ  
あとのあとの住居をさる浪をさるゆゆくたる大ねの船を

十二ノ三十三ウ  
真老吉をさる川原をさるゆゆくたる大ねの船を  
十一ノ三十三ウ  
松浦の船をさる海をさる松浦の海妹をさる月を掃き下  
十三ノ三十三ウ  
神をさる系律をさるあはしき善利を  
十四ノ三十三ウ  
白浪のききりきぬたきさるすしんの雲をさるゆゆくたる留遠りあはし  
十七ノ三十三ウ  
香取のききりきぬたきさるすしんの雲をさるゆゆくたる留遠りあはし  
十八ノ三十三ウ  
浪をさるなまを浦をさるあはしき善利を  
十九ノ三十三ウ  
さきさる此をさるあはしき善利を  
十四ノ三十三ウ  
松浦の船をさる海をさる松浦の海妹をさる月を掃き下  
四ノ三十三ウ  
打渡をさる井田をさるあはしき善利を  
十二ノ三十三ウ  
松浦の船をさる海をさる松浦の海妹をさる月を掃き下

無 間 無 時



無實 實成

結 群苗

十一四三六 尾を下しぬきち王の緒をよむればやあらじ人の如く

十一四四ウ 三三三のあまの少ね小川のせせらびのせせらびのせせらび

十一四五ウ 王の緒を尾緒よりとく緒をよむればやあらじ人の如く

十一四六ウ ひろこのの紙の着布のなちとたえととやんしききととと

十一四七ウ 住吉の信くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

十一四八ウ 姓の家を信くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

十一四九ウ 吾々の徳萌く古幹はくくくくくくくくくくくくくくく

十一五〇ウ 大海の底を信くくくくくくくくくくくくくくくくくくく

十一五一ウ 上野の依り目の苗のくくくくくくくくくくくくくくく

目

希見

十一五二ウ 小竹の上ふふふふふふ目と安く人書あく吾をりける

十一五三ウ 小筑波の志なき本をよまをれ目と安く人書あく吾をりける

十一五四ウ 小寺の玉匣を玉匣にめくくくくくくくくくくくくくく

十一五五ウ 吾の宿の時をぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬ

十一五六ウ 浦のまいくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

本 糸

最

本 糸

十一五七ウ 日の平の室の毛批の本をけく言く物とをけく言く

十一五八ウ 度の底伸を信くくくくくくくくくくくくくくくくくくく

十一五九ウ 妙の妙いの結いしきまえに本をやめくくくくくくくく

百代 百重 燃 守

父母の殿の志へ百代は貞代と名を言きたるが  
三熊の舟の傍に百重と名をいふと直におも  
吾母子の道下とをみ経何れやの言飲の燃乍あむ  
人の親のやせ事多く守山へは朝の道に君は志行をなれ  
魂をえとあめりめと小山良猪田守の母とられ

十 焼 八衢

夜行之部

七ノ三ニウ 冬隠者の志やとやく人々焼あぬ自吾とるや  
ニノナリ 冬夜のうけ宿道とやくと物をも妙に妙にあは  
六ノ三ナリ 冬夜のたき道とやくと物をも妙に妙にあは

安 不安 不 止

無 止 時

十二ノ三十五ガ 吾母子又もあやふ安に安に安に安に安に安に  
十一ノ四十三ウ 吾母子又もあやふ安に安に安に安に安に安に  
十ノ四十六ガ 安に安に安に安に安に安に安に安に安に安に  
九ノ三十四ウ 山川の水にけり安に安に安に安に安に安に安に  
八ノ三十四ウ 山川の水にけり安に安に安に安に安に安に安に  
七ノ三十四ウ 山川の水にけり安に安に安に安に安に安に安に  
六ノ三十四ウ 山川の水にけり安に安に安に安に安に安に安に  
五ノ三十四ウ 山川の水にけり安に安に安に安に安に安に安に  
四ノ三十四ウ 山川の水にけり安に安に安に安に安に安に安に  
三ノ三十四ウ 山川の水にけり安に安に安に安に安に安に安に  
二ノ三十四ウ 山川の水にけり安に安に安に安に安に安に安に  
一ノ三十四ウ 山川の水にけり安に安に安に安に安に安に安に





七ハウ  
 吾知を妹々手とていふ川又仰るも萬代かてい  
 一ハ三ホ  
 一ハ三ホ  
 青柳の枝切かへりや惜きゆいき君十志返るも  
 八ハ九ウ  
 吾姉子之家の垣内のさくら花いりとてわらわぬは似る  
 十一ナウ  
 道之の草花ゆかぬゆかぬ妹々命と吾知らぬや  
 十一ハハオ  
 燈火のひらきえいさふら花ゆらとあせと思ひ初めき

十二ハオ  
 吾見子つたをまゝすつたを吉野の山いひえさる  
 四ハオ  
 早川の瀬をあらわすをいひて者一吾子しおれ  
 七ハオ  
 海の底沖に志良しとまきとたかきと志返るも

十一ハオ  
 四長島山とて行水の名身所縁之内妻は母  
 十一ハオ  
 吾姉子衣着白の喜木川縁であぬは妹々目とて  
 十一ハオ  
 大船の船も船も浪のいし吾ハ君うやん  
 十一ハオ  
 たるをろくまきのいしをいひてまきとたかきと志返るも  
 十一ハオ  
 すきにはあやの燈火外にまきとたかきと志返るも  
 十一ハオ  
 春の日のあけのたけかみすのあかきよは志返るも  
 十一ハオ  
 中々いそそおをいひてまきとたかきと志返るも  
 十一ハオ  
 上野いそそおのあけのたけかみすのあかきよは志返るも  
 十一ハオ  
 闇のあかきよのたけかみすのあかきよは志返るも



寄不得

寄

無寄時

宣

和

若

難分事

忘

破

無居日

築

テハシク  
松の白の穂向のれ、うさうさ君カキを、こころから

七ノ三十四ウ  
吾こころのなやと、ほぬを、迎日沖し、うさうさ

十一ノ四十六カ  
栞ひの白の穂、良れ、うさうさ、妹、うさうさ

十三ノ三十五ウ  
旅者、物、おぼ、おぼ、おぼ、おぼ、おぼ、おぼ、おぼ

十一ノ三十九カ  
君、うさうさ、うさうさ、うさうさ、うさうさ、うさうさ

十一ノ四十二カ  
え、うさうさ、うさうさ、うさうさ、うさうさ、うさうさ

十二ノ十九ウ  
班鳩の、うさうさ、うさうさ、うさうさ、うさうさ、うさうさ

和行之部

十一ノ三十五カ  
吾、妹、子、おぼ、おぼ、おぼ、おぼ、おぼ、おぼ、おぼ

十一ノ三十九ウ  
い、おぼ、おぼ、おぼ、おぼ、おぼ、おぼ、おぼ、おぼ、おぼ

十一ノ四十二ウ  
白、おぼ、おぼ、おぼ、おぼ、おぼ、おぼ、おぼ、おぼ、おぼ

十一ノ四十五カ  
大、伴、の、おぼ、おぼ、おぼ、おぼ、おぼ、おぼ、おぼ

十一ノ四十八ウ  
木、の、口、の、おぼ、おぼ、おぼ、おぼ、おぼ、おぼ、おぼ

十一ノ五十一ウ  
海、さ、おぼ、おぼ、おぼ、おぼ、おぼ、おぼ、おぼ、おぼ

十一ノ五十四ウ  
高、山、の、おぼ、おぼ、おぼ、おぼ、おぼ、おぼ、おぼ、おぼ

四ノ三十五カ  
春日山朝、おぼ、おぼ、おぼ、おぼ、おぼ、おぼ、おぼ、おぼ

七ノ三十四ウ  
道、の、おぼ、おぼ、おぼ、おぼ、おぼ、おぼ、おぼ、おぼ

十八十八カ  
あつらひの光り欠ゆる若らうさいよ花のるりきこも

⑦ 處々

一ノホニウ  
○散らばるるに松原住のえの葉目サセと見えはあつた  
十四ノホニウ  
○やの物にうさきめらりりきこしは等入子あ毎にころけ

惜

○残の備もあつて来住をうさの惜き吾もい君をうさ

魚惜

十一ノホニウ  
○二葉かくろす舟のうさも妹を被まかすこよのこ

無惜

十四ノホニウ  
○人の子のうけけきい後借をあやゆむ約の惜けをうさ

折

十四ノホニウ  
○上野の佐野のうさちをうさあれ得むをうさ

此で三河国宝飯郡砥鹿神社の神主草鹿砥君う早く萬  
葉集の文字をう物ぞうへし森田氏ううして持するま  
借えて見し漏ちるも多くあれを書加つてとるは  
添つてもうさ妙きもの類いある本葉集を見りあ  
きりて彼をうさうさ合せてをうさうさ  
是とソウとさうあつたはうさうさ私にうさうさ  
あつたをうさ別も論うらうさうさうさあつた  
すうさ知のあつたはうさうさうさうさうさ  
ちえらうさうさうさ

明治廿五年甲子一廿九日

高直島根

古今集序歌抄

阿行之部

○あき

あけ

あきほ

あき

あき

あき

あき

結ぶるのまゝに濁るやほの井のあきく人よ口くぬぬれ

夕月おぬるほるまきをむくけ二見の浦にゆくまをぬれ

雲けぬぬほの山のあき中や人のこころをさすまをぬれ

雪ゆて人もまらぬたをぬやあきく人よ口くぬぬれ

片山をうきまこしらぬまよりゆくまをぬれ

あきぬぬまをぬれあきぬぬあきぬぬあきぬぬあきぬぬ

あきぬぬあきぬぬあきぬぬあきぬぬあきぬぬあきぬぬ

あらけ。

いほ

いよこあ

いほ

い

い

い

い

い

い

名取川流るるのたれ木あらたにふもむとあはれにむすむ

大よりのまの山にむすむ川にむすむとあはれにむすむ

夕月おとすやあはれにむすむとあはれにむすむ

手もれくもむすむとあはれにむすむとあはれにむすむ

まのたれにむすむとあはれにむすむとあはれにむすむ

うまよりのむすむとあはれにむすむとあはれにむすむ

むすむとあはれにむすむとあはれにむすむとあはれにむすむ

おはれにむすむとあはれにむすむとあはれにむすむとあはれにむすむ

あはれにむすむとあはれにむすむとあはれにむすむとあはれにむすむ

あはれにむすむとあはれにむすむとあはれにむすむとあはれにむすむ

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

いよこあ

いよこあ

いよこあ

いよこあ

いよこあ

いよこあ

いよこあ

いよこあ

いよこあ

いよこあ

いよこあ

いよこあ

いよこあ

いよこあ

いよこあ

いよこあ

いよこあ

いよこあ

いよこあ

いよこあ

いよこあ

いよこあ

いよこあ

いよこあ



か  
く  
く  
か  
か  
か  
か  
か  
か  
か

陸奥の成香の居の花ははくはく見入るもさや海も  
暁の曙のまほろきと百ととるまゝのぬねい吾もかまか  
着磯の居のまかとなのいゝささのむねのむね  
着中田のちかまかかかかかかかかかかかかかか  
白雪のふまふまかかかかかかかかかかかかかか  
柳のや難はのいふははははははははははははははは  
いまのいまのいまのいまのいまのいまのいまのいまの  
少儀の居のいまのいまのいまのいまのいまのいまの  
野のいまのいまのいまのいまのいまのいまのいまの  
朝をのいまのいまのいまのいまのいまのいまのいまの

き  
く  
く  
く  
く  
く  
く  
く  
く  
く

難波の生す玉のあかきまふ海まを吾に集へるな  
音定ぬのまのぬねぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ  
将をのいまのいまのいまのいまのいまのいまのいまの  
後つあめの中はあめは海まの海ぬぬぬぬぬぬぬぬぬ  
意間のいまのいまのいまのいまのいまのいまのいまの  
身利のいまのいまのいまのいまのいまのいまのいまの  
山はのいまのいまのいまのいまのいまのいまのいまの  
海はのいまのいまのいまのいまのいまのいまのいまの  
海山の若く根まのいまのいまのいまのいまのいまの  
かてはま山田橋のままままままままままままままま





〇 思ひ、村のまゝ山をらねし一帯の夢こそぬおほき  
 〇 只引の山よりくゞの雲をそよ夜の神のひろくをす  
 〇 白川の勢をよひ川底清に流れて暮の住むと想ひ  
 〇 梓よりひねのほらまほひは吾等よく(か)の世に  
 〇 陸奥の各邊のせつら吾れを事えしとこ世といへり

多行の部

〇 たえ 風吹ハ峯より方々く去るやの終てはれをき君らん  
 〇 たえが 美濃の口國のな川流きて君は仕へむ万代かきよ  
 〇 たきのこえん 足引の山より水の本より伝たきつんと世をさのひ

〇 たつ 風吹ハ沖つ白浪を田山おろしや君といふとやむ  
 〇 たづぬ 君よりり吾名ハそねや吾等あはしむと世に  
 〇 たつとく 君も魚の沖津のほらつ所より尋ねえと世に  
 〇 たらきふ 山をり水の白浪を走らうかきそをけえあはれぬ  
 〇 ちんね 霜ハ夜おけと枯せぬ村のまき市あはき沖つまねえ  
 〇 ちんね 秋のやせねてさけるものも村を物とわらぬ  
 〇 ちんね 此のよりある定めぬちんねのよく世をさるぬ  
 〇 ちんね 泊るはれ山をりなまの宿よりいほらまはまは宿も  
 〇 ちんね 冬のけり伝ふねのはねをくこま高しと人よき

くけ

春まは消る氷の残るく君とていつの昔も解せん

奈行の部

○ 奈ろく

奈ろく

なくねろく

奈ろく

奈ろく

奈ろく

奈ろく

石上ふらの中なるをろくく一 刀をいさ下し思節一 ねは  
ちろくく身とていつのそろろく今もいさ女年を強りけり  
夏ま本を思ひけりねて一 子の時きま海を社めよとく

五月山楢とるく一 ねくきけ 鳴る守をろくくすまふ  
奈ろくく一 奈ろくく一 山ろくはのねろくく奈ろくく

陸奥りみとろくく右那川をろくく一 奈ろくく  
三言ねの古川のへろくく奈ろくく奈ろくく奈ろくく

神は月時白くねろくく奈ろくく奈ろくく奈ろくく奈ろくく  
奈ろくく奈ろくく奈ろくく奈ろくく奈ろくく奈ろくく奈ろくく

○ 奈ろく

ねろく

奈ろく

奈ろく

我国の梅の上枝り奈ろくく奈ろくく奈ろくく奈ろくく  
風吹る海流くは岸のねろくく奈ろくく奈ろくく奈ろくく  
隠れ居の下り奈ろくく奈ろくく奈ろくく奈ろくく奈ろくく  
奈ろくく奈ろくく奈ろくく奈ろくく奈ろくく奈ろくく奈ろくく

波行の部

○ はー

はー

本も何昔<sup>昔</sup>もろくく奈ろくく奈ろくく奈ろくく奈ろくく  
春日けのをろくく奈ろくく奈ろくく奈ろくく奈ろくく

はるく

はる

はま

○ いは

<sup>まをたて</sup>い

○ ふ

ふ

吉野川岩原まきくは水の早きし

昔此川水の早きし

あまきよあはれきよのふきねは

音足子衣昔の向ふ

一のまの峯の朝き

住江のねと久き

<sup>まの御い</sup>忘らふ

浮草の上のま

渡川の渡む

まきといふ

ふ

○ は

は

音母ま

山梅

あまのま

麻行の部

○ ま

ま

まきか

ま

ま

ま

ま

まふ

吾見子と都へゆく塩釜のまふまふのつたえんか  
宵のつらほはくくすや。暮虫はすしつゆのたもすか

まふ

吾多志女と路ふたふすまふまふのつたえんか

まふ

河の原をひくまふまふのつたえんか

まふ

沖へまふまふのつたえんか

まふ

陸奥の信まふまふのつたえんか

まふ

伊予の海まふまふのつたえんか

まふ

春をみぬりゆのまふまふのつたえんか

まふ

石上まふまふのつたえんか

まふ

等々津降積雪のまふまふのつたえんか

まふ

君とまふまふのつたえんか

夜行之行

まふ

足りのまふまふのつたえんか

まふ

秋たふまふのつたえんか

まふ

下の帯のまふまふのつたえんか

まふ

夏草の上まふまふのつたえんか

まふ

流れては見えぬのまふまふのつたえんか

よむ  
よむ

絶えぬの藤をの川の原をいふやうに  
住者のたふしはなほ昔の如く  
梓うりしを来き方におもひは

羅行之部

和行之部

○ 月夜  
月夜

海を舟屋住居の昔からと  
舟のすまひはみづの舟の  
舟のすまひはみづの舟の

よむ  
よむ

○ 秋夜  
○ 秋夜  
○ 秋夜

（二首ハ加行ニ入ルキヤリ）

明治二十一年三月廿八日抄出

高田島根









鄉蠶豆三七園鄉工人員表

								黑 蠶 百十三人	蠶 絲 三百三十人	蠶 具 十二人
蠶 豆 園	農	千二百六十四人	百十八人	三十四人		少十三人				
	文									
蠶 豆 園	農	千四百八十人	三百八十八人	二百五十八人	少十二人	八十八人	五十二人	四百八十八人	八百一十二人	
	文									
蠶 豆 園	農	二千三百十八人	二百六十八人	四百三十八人	百二十十八人	百五十八人	少十六人	少十六人	四百三十八人	
	文				一人					
蠶 豆 園	農	四千六百六十八人	少百十八人	六百六十八人	百六十八人	三百一十八人	百四十八人	千四百六十八人	少百三十八人	

